

福岡気功の会 会報「ゆーき」
アーカイブス 7

気功業界

CONTENTS

- | | |
|----------------|-----------|
| 1 憂鬱なオウムの銀行レース | 44-950531 |
| 2 関西気功協会の出直し | 72-991217 |
| 7 法輪功って何なの? | 70-990810 |
| 10 中国気功を締めつけ | 73-000303 |
| 11 法輪功その後 | 75-000606 |
| 12 法輪功と中国気功の前途 | 79-010302 |
| 14 気功は世界中に広まるか | 83-011116 |

銀行レース=競馬などで本命優勝が確実視されるため賭け率が下がってしまうようなレースには手堅い銀行が大金を賭ける。



憂鬱なオウムの銀行レース

(や)

このページはわざと細かい字で書く。——というのも今や一億総オウム評論家で、彼らに対してなら相当強く敵意をこめて発言しても久し振りに決して反対意見に出会うことなく共感・同意が得られる状況だからなのだ。この小文はこのような状況とそりが合わないにちがいない。目立ちたくないが黙過もできぬ。敢えて書いておこうと。

国家のほうはといえば、こういう世論の追い風を受けて、いつだっておおびらにやりたくてたまらない別件逮捕、微罪逮捕を今だとばかりに喜々として連発。「これは国家と国家の戦いだから」との国家公安委員長の大本営発表を聞けば、この事件が彼らにとってなんでもありの戦争だったことがわかる。一方、毒ガス、狙撃、洗脳、拉致と大それた戦争（ハルマゲドン）を準備していたくせに、オウムの親玉連中ときたら、捕まってからシラをきりとおせないなんて、甘いやつらだ。根性ないくせに世の中敵にまわすようなことするな。第一、地下鉄サリンの時からこれはオウムだとみんなから目星をつけられて、その後やっぱりそうだったなんてこんな素人予想が当たっちゃうんだからかっこ悪くてたまらない。最底のシナリオだ。

だが、上の連中がどんなに抜けていようと、低俗だろうと、狂っていようと、それがオウムの本質なのではないことは明らかだ。なのに、テレビに出てくる解説者たちの評論も、鈴木邦夫氏と中沢新一氏を除けばこの時代・この社会に対する根本的な批判精神のかけらも持ち合わせないただの無教養な芸能レポーターのそれと同じである。だからオウムなんかのしてくるんだよ、と何度思ったことか。

オウムの本質は、麻原をはじめとする幹部連中の言動にはない。しかし、麻原の瞑想の中にはある。

麻原は、瞑想中に頻繁に幻覚に遭遇している。彼はその中で自分にとって都合のいいものについてだけ正夢または予知夢として信者に対して発表してしまう。好意的に想像すると本当に予知していたものもあったのだろう。どうして衆議院選挙の大恥落選の時、正夢もあるけどただの妄想もあるんだ、オレはまだその程度だ、修行が足らん、と思わなかったのだろう。それはさておき、「瞑想の中には真実がある」ということがオウムにとってどんなに重要なことか、凡俗のテレビ解説者にはわかっていない。なぜなら、瞑想なんかしたことがないからである。

私にはわかる。なぜなら瞑想したことがあるからである。瞑想と言っても気功の静功なのだが、彼らがやっていることと大差ない、とこの際は言っておく。中沢氏は私のように言わないが、瞑想者として、断固として1万信者に対して呼びかける。

同じ魂の修行をめざすものとして、私は断言しますが、修行者にもどるところなどありません。ただ自分を縛っていたもの、自分をだましていたものがあつたとしたら、それを全力で否定し、振り払って、ただ前をみつめて歩いていくことだけが私たちにできることです。そうでなければ、いったん高みをめざした魂は、深い屈辱を味わうことになるだけです。

私のチベット人のグルは、私におしえなければならぬことがほぼ終わったとき、私にこう言いました。

「もうこれから先は、おまえが一人でやっていくことだ。いつまでも私に頼ったりしてはいけない。本当のグルはおまえの心そのものだ。だから、いつまでも、私のそばにぐずぐずしてはいけない。とっとと、遠くへ行きなさい。そして自分一人の探究を続けなさい。どんなに嫌れていても、そうすれば、私の心はいつでもおまえと一緒にだよ」

オウムの信者であるだけで罵声を浴び、石を投げられかねない状況の中で、これだけはっきりと彼らを修行者と認め、入信の動機を擁護すれば、巷間のオウム敵視者たちに、中沢はオウムの味方だ、ときっと袋たたきにあうことだろう。中沢氏は一言も麻原以下幹部連中の仕事を肯定していない。それでも彼らは見逃しはしない。あぶない奴だとわかるからだ。

OK、たいしたタマではないけれど私もその袋に入れてもらおうじゃないか。

少なくとも今年いっぱい、巷間のオウム敵視者たちをはじめとする『見えるものだけに依拠する人生観』の人々の天下で、親玉連中が皆別荘に行っちゃって取り残されたオウム信者に対して「家庭にもどって、もう宗教なんていうあぶないものから足を洗って、人間の霊性がどうのとか、文明がどうのなんて考えつめたりするのをやめて、ただまわりのみんながやっているような無難な生き方」を求めよう。「見えないものの中に意味をさぐろうとする一派」への逆襲が奏功するだろう。気功も健康法として体を動かしている内はいいが、静功は瞑想だからオウムだ、自発動は靈動だからオウムだ、と言われかねない。

オームは、聖なる音、宇宙の響きである。ヨガを始める前に唱え、終わりに唱える。サティアンは真理だ。麻原以下幹部連中のお陰で、これらの語も汚れてしまった。瞑想も、それを生活に組み込んでいる人は別として、これからやってみようという人はよほどの変わり者ということになる。ヨガを教えていたら食いっぱぐれてしまったかも。だからといって私には単純に気功でよかったとはどうしても思えないのだ。

かつて若者には共産主義という自我を与えてくれる怪物があった。今日の若者も渴きを覚え、オウムにそれを求めた。共産主義より相当ちがいが、もうひとつの世界にちがいはなかった。怪物の腹の中から本物のサティアンを見つけだすのは厄介な作業だが、昔の若者もやったことだ、今日の若者もやりとげるだろう。オウムの本質は、そういう若者が明らかにするよ。きっと凡俗のテレビ解説者よりはるかにましな時代精神をもって語るにちがいない。

気功実践者は、とりえず練習することにしよう。ヨガ実践者がヨガをするように。私たちは、殺と静の裡にかぎりない小宇宙が広がっていることを知っている。オウムの轍を踏まぬよう、要は自分ですることだ。そのうち、気功とオウムの修行は違ふぞ、気功は安全だぞ、健全だぞとふれまわる輩が出てくるだろうが、それを聞いて真に受けて、声を掛けてくる人がいるだろうか。

競馬ファンなら銀行レースに手に汗握らない。もうそろそろオウムのニュースから一步身を引いて接するといい。あれは精神衛生上よろしくない。

(引用は、週刊プレイボーイ 5.30 より)

関西気功協会の出なおし

山部嘉彦

●解散という選択肢

関西気功協会が間もなく解散し、リニューアルオープンすることになった。10年以上も続いた気功の老舗の組織が解散するというのに《これまでの組織的活動のやり方では常務経費が財政を圧迫して赤字経営に転落してしまうという危機感から協会の存在意義にまで遡って議論を重ねた結果、現実にもつた理念と方法で、組織、人事ともに刷新して出直そうということになった》という説明では納得できないものだ。組織がおかしくなる原因は人事か財政かだと事情通は言うが、建て直しではなく解散出直しという結論を選択したのにはやはり理由がある。組織に纏わる印象、癖などを一掃しようという意図がある。私は現場の当事者ではないが、当初からの会員であり、理事でもあるので、間近に見てきて思うことは、ある。これからの日本の気功のことを考える上で、整理しておきたいことでもあるので、簡単にまとめてみたい。

●健康ヘルパー？！

代表の津村氏が「今はいっさいを『現代人の慢性疲労の解決』に向けてもいい、そのためにすぐ役立つ気功をひろめたい、気功という名前も必要ないとさえ思っています」(BODY SPACE №4;1999.3)と関西気功協会の外で言いだし、その「運動」の担い手「健康ヘルパー」を養成するプログラムを関西気功協会もやらないかというスタンスで提案してきたのは今年になってからのことだ。それを契機として、これまでの協会のあり方——代表、事務局、指導者、会員制度、企画と運営…について検証しなおし、今後これでもいいのか、ともかく財政はダメだ…という議論が出てきて、協会は大きく揺れだしたのは今年の総会の前のころではなかったか。もちろんここに至るまでにいくつかの伏線はあるのだけれど、津村氏のこの提案は協会にとって踏み絵のようなものではなかったろうか。

気功協会の代表が気功の企画を提案するのなら分かるが、津村氏は代表としてではなく、大津気功会ないしボディスペースという組織を主宰する津村氏個人からの総合的健康運動立ち上げの提案であったので、事務局はこの提案をめぐって迷走する。この健康ヘルパー運動は大きい仕事で、もし協会が取り組むとなったら片手間でできない。取り組めば、気功という名前ではなく、RTSプログラムを推進する主体となるわけである。RTSというのは、リラックス、タッチング、サポートの頭文字で「気功や整体、操体法、つばマッサージやお灸などからコンパクトに綜合したもの」だそう。私は外野席にいるので、津村氏は自分のやりたいことをその中に気功も含んでから協会のスタッフも二つ返事でやってくれるんだろと気軽に持ちかけたと見えた。でも、その提案の内容は私の目にはアナクロに映ったので、会報69で「おいおい、大丈夫かよ。(この健康ヘルパー)まるで毛沢東の裸足の医者なのだが〈疲れ切った人民の中へ〉入って行こうってこと!?! ただのお節介じゃないのかな…」と書いたのである。この下りを読んで、津村氏は水を注されたと感じて激怒したようだ。なにせ、完璧な批判だからね。

●糞して寝てる

私の意見はこうだ。現代日本人が慢性疲労症候群(CFS)とかで孤独死や過労死に至るとしても、それは自分で選んだ道だ。自分に責任がある。途中で立ち止まることは、いくらでもできるじゃないか。そして、現代日本人は、かつてのロシアの農村の人民のように貧しくも悲惨でもなく、かつての中国の農村のように戦争で蹂躪され疲弊しているわけでもなく、迷信に満ちてもいない。第一ぶくぶく太って栄養たっぷりだから、下腹に溜まった備蓄だけで何も食わずに十日間じっと休んだら、それだけで絶対元気になること請け合いなのである。だから、それはお節介ってやつだぜ、疲れて死にそうな奴がいたら、おい、家へ帰って糞して二三日寝てろって声かけてやればいいじゃないか、と私は思うのである。それ

でクビになっちゃったっていいじゃない。孤独死や疲労死とどっちがいいのさと。

それでもそういう人を助けたいというのを私は止めるつもりはない。だから『それでもあなたの道を行け』（彌生）と突き放したのだ。そんなボランティアでヘルパーやる暇あったら俺は練功する。そんな気分だった。私はお節介が嫌いなのである。天は自ら助くるものを助く。気功はまず自救自助の方法である。だから、自分でなんとかしたいとやって来る人になんとかなるからと励まし自分でやれることを教える。そして、本来、それしかできないと私は思っている。あとは、私自身ができるだけ健康になることである。もし疲れ切った人が助けてくれと言ってきたら、隣にただ坐ってやるだけのために。

●健康ヘルパーは25年前の夢

津村氏は最近《関西気功協会までの23年間、関西気功協会の12年間は、今やりはじめた「大事業」の助走に過ぎなかった。今RTS、健康ヘルパーと言っているが、その内容は25年前、岡島治夫と書いた『東洋体育道の基礎』に全部提起してある。》というようなことを言っている。そのとおりだろうと思う。ただしその本の中には、私に言わせれば気功のホントのことなんか一行も書いていない。だから、RTSのキャンペーン運動は関西気功協会のフットワークの重たい連中なんか放っておいて、関西気功協会代表なんていう肩書もさっさと外して、初めっからBODY SPACE一本でやれば良かったんだと私は思う。

それはともかく、津村氏の「大事業」と組織としての関西気功協会は結局合流しなかった。関西気功協会は設立以来ずっと津村代表の企画と交流力とを推進力として活動してきた。しばしば、協会の事務局は津村氏の手足のようにであった。しかし、良きにつけ悪きにつけ、ここ2～3年は相対的になってきていたので、今回のことはただ来る時が来たただけなのかもしれない。

●気功観間の車しみ

ところで、私が津村氏の「大事業」の傍観者になってしまったことは、ある意味で必然だと感じている。というのは気功観が違うからである。実は長い間、同じだと錯覚していた。同じ道をともに歩んでいると思っていた。津村氏の精力的な交流のおかげで中国のたいへん質のよい良心的な気功家と結びついてきたし、全国の非営利的な気功愛好者や普及に熱心な人達と結びついてきたのだから。その一方、私たちの外縁には、気功を外気治療法であるとして特殊能力の持ち主である気功師にかかればどんな病気でもたちまち治ってしまうかのように言いつのったり、触れずに倒す超能力の見世物として金儲けに勤しんでいる、実質は気功と何の関係もない連中がうようよしていた。今でもそういう輩ははったりを効かせて善良だが無知なひとびとをカモにして、気功に対する悪印象を生産し続けている。そういう輩の気功観と私や津村氏の気功観は対立的である。だから、津村氏の気功観と私のそれは一致しているように見えても不思議ではない。

外気治療にはいろいろな問題がたくさんある。本当に出来る人は数えるほどしかいない。気功を医療に応用することと外気治療を施すことは別のことである。私は無論気功による治療行為を否定はしないが、慎重に扱い、患者といえどもただひたすら治療を受けるだけの消極的受動的な患者であることを戒め、病気を克服するために自ら積極的主体的に練功する必要を理解する患者へと意識改革することを促すことを治療の大切な一部と考えるものだ。津村氏も同様の考えだと思う。

実際、私自身が治療する立場になった時、患者にふさわしい気功を指導することもある。そして、この十数年間のうちに身につけたさまざまな気功以外の技術を用いて患者を治癒に導く手伝いをしてあげられることもある。だが、気功という店の間口がせまいからといって、簡単にできそうな他の店のメチエを持ち込んできてずらりと並べ、これは効きますこれは便利ですこれは常識です、これで疲れはふつとびますというのがごとき店子にはなりたくないのだ。とりあえず、趣味の問題として。

津村氏は最近の出会いの中で、現代日本人の疲労状態の深刻さにある種の危機感を抱くに至ったのだろう。自分の経験、知識、技術、情報を編集して提供すれば比較的容易にこの危機を回避できるのではないかとの見通しを持ったのだろう。そして同時に使命感のようなものを感じたのだろう。その時、気功は近しく詳しく知ってはいるが、津村氏にとって他の健康法治療法と同列の手技操法としてラインナップされたにちがいない。それは、それこそ25年前に東洋体育道とひとくくりにして論じた態度と全く同じではないかと思う。その当時無知だった私にはたいへん有意義な参考書ではあったが、ここは星野

氏（当時の津村、岡島氏の同志であり、その後焦国瑞老師の気功の普及に努めている人）や津村氏の導きによって気功の世界に入った恩を棚に上げて、その拡大普及版を読んでみる気には到底なれないよと言わざるをえないのである。

なぜなら、私は否応なく外から気功家として見られる以上は気功家として実存すべきだと思っているからである。気功家とは何か。練功によって得たものを社会に還元する人、である。家族に還元する。地域に還元する。仲間うちに還元する……。まあ、ささやかなものである。もちろん、気功の手ほどきをすることもあるが、そんなことより、些細なことでも怒らなくなることだとか、息が長くなって人の言うことをよく聞くことができるとか、人が安心して相談したくなる人になるとか、そういうことが自然にできるようになってしまっていることを、私は社会に還元する第一のことと思っている。気功業界で見知った情報を編集して公開すること、なのではない。それは重要なことだが、気功家の仕事というよりは、(気功をよく知る)評論家の仕事だろう。津村氏は評論家という肩書で長年生活してきたのだから、それはこれからも是非やっていただきたい仕事ではある。しかし、それ以上のこと（たとえば、健康運動?として技術や情報を無原則に持ち出すこと）は、心配が先に立つ。大胆過ぎるし、危なすぎると思う。私は津村氏と同じくらいはさまざまな治療技術を駆使できていると思っているが、とてもその気にはなれない。うまく説明できないが、鳥肌が立つくらい危険だと感じる。老婆心ながら、ヘルパーなんて名乗るのなら、医業資格はなくてもせめて介護ヘルパーの2級資格と臨床心理士の資格ぐらいはとってからにしてほしいと思う。いや、せめて、そんな必要がないかどうかを議論してからとりかかってほしいと思う。老婆心というより、…意地悪じじいのケチにすぎないのではあるが。

●とにかく手術は必要だった

本題に戻そう。関西気功協会は、この間議論を重ね、解散するという結論を導き出した。私は大切な友人たちのことだから、比較的早いうちから、その議論の環の中に首を突っ込んできた。むしろ心配してきたと言ったほうがいいのかもかもしれない。協会が家賃や事務局人件費を含めて常務経費を月々60万円もかけて運営するにあたって、収入の柱である会員会費収入がここ数年伸びないという現実、組織危機の温床だった。もちろん、これからは伸びるといふ根拠は全然ない。である以上、協会として今後どうするかは、自分たちがかちかち山の狸であるとして考えなければならないことだったのである。とにかく財政的問題として手術が必要なことだけは明らかだった。私は理事ではあるが外様である。だから、事務局にはケツに火がついとるぞとだけ折にふれて言っただけで来た。で、金を借りる当てがあるわけでもなく、またそのつもりもないのに、米舂までには積年の黒字ストックを常務経費が食いつぶすところまで分かっていて、どうしようかという相談もこうしようという提案も組織の代表である津村氏からさっぱり出ないというので、外様ながら私は理事として、意見書を書いた。本当に嫌々ながらお節介の、いらぬ口を叩いたのである。夏、8月末のことであった。

それから、少し動きはじめて、結局解散して出直そうということになった。具体的な経緯は私は知らない。いろいろな意見が出たであろう。しかし、結論が出たということは折り合いがついたということだ。津村氏は、協会が健康ヘルパー運動に参画しなかっただけでなく、彼の重要な活動の舞台であった協会そのものを潰してしまうことになって、面白くなかったかもしれない。津村氏は関西気功協会はその歴史的使命を終えたのだから関西気功協会の名前は天に返すと言ったそうである。

●津村氏の功績

関わった時期やその長さ、関わりかたによって思いはさまざま、総括もさまざまにちがいない。しかし、津村氏が最近の何年間かは別として、それまでの長い期間、質的にも量的にも、内部に対しても外部に対しても、関西気功協会の名実共に代表として「気功業界」を牽引してきたことは、誰の目にも明らかである。とくに、気功が何であるかうまく説明できない初期のころ、津村氏が書いた多くの気功の本がもっとも質のよいガイドブックであったことは誰もが認めることである。また、10年という長期にわたる気功の日中交流を貫徹して、気功の深淵を垣間見ることができたのも、津村氏の展望と企画力に負うところが大きい。おかげで、気功はまがりなりにも日本に定着した。その仕事は称賛に値するし、感謝している人は数知れない。私ももちろんそのひとりである。

だから、といてもいいと思うが、関西気功協会は解散してしまうが、協会がなくなってしまうのな

ら気功もやめると言う人はいないのではないかと思う。曲がりなりにも、気功愛好者は自立したのだ。

●何を打ち出すかが問題

で、今後はどうなるのか。それは、協会の会員証を返上するとき、一人一人が「出直すんだったら、こんなことやったらいい、それだったら自分はできる…」というように、何か発言したらいいと思う。

たとえば私は、これまでと同様、いやこれからはもっと質の高い情報が〈売り〉になる。しっかり各方面に取材した記事、経験を積んだ人の論考で各地の気功愛好者とつながっていくという方向性が大事だと思うから、そういうことになったら、協力するよと言ってある。ともかく、どうしようもなくなってから潰れるのとは全然違うので、リニューアルオープンで何を打ち出せるか、楽しみなことである。

気功協会と名乗ろうと、気功の会と名乗ろうと、在野の任意団体。そのへんの公民館の趣味のサークルとたいして変わらないのであるから、等身大の組織と分相応の仕事がすればいいのである。事務局の人件費をコンスタントにカバーするだけの収入を確保しなければならないのが、たいへんといえたいへんだけれど、やってやれないことはないのじゃないか。当たり前なことだけど、気功の団体なのだから、気功の普及と研究と指導者の育成を中心にやったらいい。関西旅行協会などと擲擲されないようにね。私が今、外野から言えるのはそのくらいのことである。

●曲がりなりにも日本の気功

関西気功協会がその歴史的使命を終えた、とする総括には真実があると私は思う。日本の気功の草創期の使命、それは《中国で発表された気功（の功法）を次々に紹介し、練功の仕方と気功がどのようなものであるのかを体験をとおして理解する基礎を培う》という歴史的使命である。もちろん、始めからそのつもりがあったわけではない。ふりかえてみると、そういう有意義な仕事をしてきたんだなあ、ということである。

80年代後半、相次いで来日する多くの老師が「あれこれとするな、私が伝えるものだけを真剣につけてやりなさい」と言うのを全然守らず、A老師が来ればA老師の、B老師が来ればB老師の気功を貪欲に吸収しようと誰もがハシゴしたものである。それを知ったらそれぞれの老師は苦々しく思ったに違いないと思うが、私たちは、たくさんの功法を知っていることが気功を知っているかのように錯覚したかったのである。そうして、体は正直で、味わいのある功法だけがレパートリーとして残った。ある人は、紆余曲折を経て、最初に老師が言ったようにその気功（功法）だけをやるようになった。いわば伴侶となる気功を見つけたのである。それは、いろいろ体験してきて得た結論だから、尊いのである。私は今でも、いろいろな功法を体験してみることを勧めたい（それで、柱となる功法をいくつか3~4ヵ月ごとに体験していくという教室のカリキュラムを定着させ、余計な苦勞をせずニュアンスの違う気功を居ながらにして体験できるようにしたのである）。もし、関西気功協会が何でも体験してみようといういささか無節操な路線を敷かなかったら、今日の日本の気功はなかったといって過言ではない。この体験があったからこそ、気功というものが分かり、新しく気功が入ってきても、それがどういう位置づけのどういう傾向の気功かを見抜くことができるようになったのである。ある意味では、私たちは中国の多くの老師よりも、よほど気功のことが分かっていると言える。

●気功的なものが気功？

津村氏は、気功というものがどういうものかについて、かなり早いうちに答えを出した人である。それは中国気功とは言うが、世界各地の諸民族が自然と心通わす気功的なものを持っていた。アイヌにもあるしハワイにもあるし、アメリカンネイティヴにも、フィンランドのサーメにも…ある、という解釈である。私は、これには同調しなかった。逆さまだからだ。AにもBにもC…にも共通するアミニズムを中国気功の中にも見いだすことができると言えるだけだと思ったからである。それは気功の本質ではない。しかし、考えてみれば、気功は整体や操体や…と同様の健康法、徒手治療法であるという言い方と同じパターンによる理解ではないか。

津村氏がそういう解釈をしてみせてからしばらくたってから、趙光老師の《気功は心の安祥を啓く修行である》というパンフレットを読んだ。はじめ、腑に落ちなかったが、練功をまじめにやりはじめてから、だんだん納得できるようになった。修行ということになれば、津村氏の解釈は色を失う。またそんなつもりはないと言う人も出てくるにちがいない。私自身の練功はいわゆる修行とは程遠いものであ

るだけに気功は修行だと強く主張する気はないが、こつこつやらなければ身につかないものであるという確信は手に入れた。気功は、数ある功の中でもっともわかりにくく、練っている本人だけがその効を知ることができる術で、なかなかどうして扱いづらい。

気功の「気」にアクセントをおけば、津村氏の解釈はなるほどということになるだろう。「功」にアクセントをおけば、趙光老師の説明は分かりやすい。

●流行功法の評価

いずれにしても、気功が新生中国の自力更生のスローガンの申し子として保健医療行政の一翼を担っていた、すなわち当初の健康の自立のための手段という位相から次第にはみ出して先祖帰りしながら、つまり気功というのはもともとは、宗教の修法である、武術の築基功である…といった事実を公然と表明するようになったことで、中国では気功の第二の時期に入ったのである。いいかえれば大型新参宗教気功の時代で、1990年前後から始まり、発表された気功はそれぞれ生誕の地でしばらく助走して勢いが貯まったら、一気に全国展開して続々肥大化した。その「最高傑作」が法輪功である。

一体これは何だ？ と考える頭を持てるようになったのは、皮肉にも十余年間中国気功をやって来たからである。北京の王滬生老師は、これらの気功を一括して「流行功法」と呼ぶ。日本語に翻訳すると、根無し草功法というものである。大流行したからには日本にも伝わる。禅密功、香功、元極功、智能功そして法輪功などである。私も、これらをみな体験した。面白いことは面白い。中国人が浮かれるのも分からないわけではないが、何分浅い。そして、臭い。禅密功のほかは全く心を動かされなかった。

津村氏はどうか。それは本人に聞いてみるしかない。が、香功に初級功法としての可能性を認めてNHKテレビの連続講座で紹介したぐらいだし、棒氣貫頂法で知られる智能功の龐明(ほうめい)氏とは直接契約して全著作の翻訳権を持っているぐらいだから、高く評価しているのではと想像できる。アンテナの向きも感度も私とは大分違うということは、最近よく分かったことである。しかし、津村氏のようにネットワーク軽くいろいろなものを色眼鏡をかけずに紹介してくれる人がいるのはありがたいことで、情報がなければ評価も不可能である。居ながらにして、そいつはまずいとだけ言っている私は横着だなど思っている。

●自分で気功を作る時が来た

しかし、ここに来て、私は漸く現代中国気功がどういう作られ方をしたのか分かってきたのである。何を素材にして、どのようなコンセプトで、誰を対象に、作ったか。どんな内的制約があり、外的制約が働いたか。それが分かってきた。伝えんとするものが分かってきたのだから、伝え方の癖や制約を取り除けば、老師がそれぞれ気功をどう捉えているか、その気功観が分かってきた。それで、そのくらいだったら自分にもできるかなと不遜にも思いはじめ、いくつかの習作を作ってみたりしているのであるが、これが面白い。簡化やコラージュとは全く違う創作性、芸術性が要求されるからであろうか。

関西気功協会は歴史的使命を終えた。では、私たちの周辺にまた私たちの中に新しい歴史的使命はあるか。それは、協会設立時にやろうとしたことが歴史的な意味を持つかどうか分からなかったのと同様分からなくて当然であるが、遺産に頼るのではなく、発展的に継承する気概でもって出直すことができれば、関西気功協会が果たした役割に匹敵する仕事ができると私は思う。協会は、いわば何もないところから出発した。気功がどんなものか何も知らずに、こいつは凄そうだという感覚で食らいついたのだった。今は違う。練功してきたおかげで、気功の奥の方が見えてきた。まさに、関西気功協会の12年をまるごと含むこの14~5年は日本の、いや世界性を獲得した気功のための助走だったのである。実は、気功はこれからののだ。私は、出直しを祝福したい。

＊

関西気功協会：1986年に設立された日本で最初の気功団体のひとつ。関西地方各地で根づきはじめてきた気功愛好者のグループが連合して気功の情報センター、交流の拠点となった。早くから中国武術、医術、養生法に関心を持ち、研究実践してきた津村喬氏が代表となり、強力なリーダーシップを発揮して日本にオーソドックスな気功を普及させ、自治体や企業も気功に対して一定の信用を置くに至った。会員数約1000人。機関紙『脈脈』（月刊）。

津村喬：評論家。1948年生。早稲田大学中退。ヨガ太極拳、中国体育道と関心をつなぎ、気功に至る。

法輪功って何なの？

山部嘉彦

*以下「 」内の会話は筆者の憶測、聞いたような嘘であります。

ちょっと耳障りなのが、「気功集団法輪功、非合法化」のニュースである。これでまた、気功は怪しいということになるだろう。オウムの時も、オウムと付かず離れずだった気功はちゃんとそう感じた多くの一般大衆から眉つばのスタンスで見られたが、今度は気功が前面に出ているので一般大衆の腰はすっかり引いてこれ以上はない及び腰となるだろう。もっとも、これで気功をやめる人はいないと思うけれど。

しかし、「隣の人」に、法輪功って何なの？あなたのやってるのと同じ？どんな気功？などと質問されるかも知れない。もう、されちゃった？ただ知らないと答えるのも芸のない話なので、私のところに集まった情報を整理して、ニュース解説しておきたい。読む人なりに噛みくだいて理解してほしい。

なぜ非合法とされ、弾圧されてしまったのか

なぜ法輪功が非合法で幹部連中が逮捕されてしまうのか。かれこれ8年間も何のおとがめもなくやってきたというのに？

それは中国政府＝共産党が仏教思想（法輪功）の波及力よりも思想的にも組織的にも劣等だから、脅えて権力に訴えたというだけのこと。へなちょこの警官が気合の入ったヤクザにたしなめられたらビビってピストルを撃っちゃった、と。

大分以前から流行っていた法輪功を、当局は苦々しく思っていた。天津の政府系の雑誌（天津師範大学刊行物）に、近頃流行の法輪功は青少年に悪影響を与えるから取り締まるべきだという趣旨の論文が載った。4月中旬である。それを読んだ法輪功の若いメンバー6千人がそれに抗議して雑誌社に押し掛け悶着を起こして当局に逮捕されるという事件があった。4月19日である。

その直後、その顛末をアメリカに在住の親分李洪志に伝えると、さっそく親分自ら北京に飛んで国内の法輪功の幹部と今後の対応を協議した。「では、全国の同志に檄をとばして4月25日に北京に集合をかけ、天安門で氣勢をあげてから政府要人の住む中南海に押し掛けて座り込もう、規模はとりあえず2万、目的は社会的認知を得ること。そのために、わが法輪大法研究会が平和的な組織であること、合法的活動をしていることをアピールすること、整然と訴えるんだ。」と。それが実際、ちゃんと2万集まり、整然とデモを行なって、サッと解散しちゃったから、党の幹部は大いに驚いた。「なかなか見事だよ、連中は。我が党もあの組織力と規律性は見習うべきだな」なんて余裕の大幹部もいたが、公安サイドは背ざめた。「今度は天安門のちんぴらとは違う、李洪志が武器を取れと命令したら死を恐れず突撃する奴がごっそりいるんだぞ。周到な準備をして、一網打尽にすべきである」と。

そして今度は山東省の濰坊という町で悶着がもちあがった。その町で発行されている雑誌がまた法輪功とその親分を6月以降たびたび中傷したのだ。要するに、仕組んだ挑発。で、また抗議にでかけて拘束された。それに対して14日早朝から法輪功が5千人動員して抗議デモを行ない、翌日市長が屈伏して今後は法輪功のことは書かせないから、と約束して収拾。さあ、一大事。なによりメンツの中国人当局はもう絶対許さん！と組織決定。政府党軍部内の相当数の法輪功支持者を黙らせわずか4日間でスタンバイ、一気に動いたのである。で19日夜から全国各地で幹部連中を一斉逮捕、次いで非合法のお触れ。これからは逮捕とキャンペーンによる組織の切り崩しである。

共産党は、当面の敵がいないと存在できない組織だから、周りにいなけりゃ内部にでっち上げてでも作る、法輪功は彼らにとって飛んで火に入る夏の虫というわけである。

法輪功の幹部は「共産党の党員の数より多い1億もの大衆を敵にまわしてどうしようというのか」などと寝言を言っているが、公安はこの2か月、徹底的に内偵して「中核は200万、これなら潰せる。理由

は何とでもつけられる、きっかけがあれば一斉検挙するぞ。それから李には刺客、もう仕掛けてあるからな、うまくやれよ」と段取り。ここまでが7月に入るまで固まっていた。その権力意志が山東省の田舎町で先行的に漏れ出たわけである。

それにしても、なぜ、当局は法輪功を国家＝共産党の敵とみなしたのか。ただ数量だけなのか。確かに多い。非共産主義的組織が人口の1/10というのは多すぎる。これまでも、社会的影響力が強くなりすぎないように、どんな集団であれ、またカリスマ的指導者であれ、公安は監視しつづけてきた。最近では、同じ気功の元極功も目を着けられていた。かれらも、決して少なくない数の支持者を擁した。が、実際の弾圧はなかった。法輪功は、ただ数が多いだけでなく、これまでの気功となにか違うことに気づかねばならない。

法輪功の下地

ここで解放後の中国気功のショートヒストリー。これを簡単におさらいしておこう。法輪功も、法輪功現象も突然出現したわけではない、前史というべきものがあるからである。

今日、気功と呼び慣らわしているものの原型は古く2000年以上の歴史がある。今日の気功はと言えば1960年ころには形を成した。それは解放後、世界中どの国からも援助なしに国を建て直すために、伝統文化遺産に学ぶしかない条件の中で整えられたのである。この時期は、いわゆる古典気功（導引や静坐の復刻とそのリニューアルバージョンの紹介普及が中心。そして、それに続いて主だった研究者が古典に典拠した創作動功を発表し始めたのである。

その矢先、文化大革命が勃発し、その後10年にわたって気功は迫害と弾圧を被ることになる。

毛沢東が死んで、動乱の時代は収束していくが、気功はなかなかおっぴらに活動しようとしなかった。何時また弾圧を食らうか分からなかったからである。しかし、どうやら「科学的な」根拠のある心身技法としてならいらいしと分かってからは、滑稽なほど「科学的な」気功がどんどん紹介されるようになった。医療界で盛んに気功の効果が喧伝された。1980年前後までの傾向である。

そのころ、日本にも、ぼつぼつ気功が「気功」として紹介され始めるのである。

中国では、気の正体を科学的に明らかにしようと、盛んに実験が繰り返され、いわゆる「外気」と「特殊効能」＝超能力がブームとなっていく。その頂点に立った男が「現代の神医」嚴新。そんな中、それまで黙っていた宗教気功が満を持して登場するのである。ちょっとくらい神秘的でも大丈夫みたいだぞ、と。

その代表格が、劉漢文の禪密功。1984年には瀋陽で医療効果があると認められ、その後爆発的に流行った。流行った理由は治るからではない。仏教を気功を通じて信仰することができたからである、と私は思う88年には、田瑞生が洛陽で香功を発表する。爆発的に流行して日本でも追随する組織まで現れ、大いに流行した。これも仏教気功。香功では、神秘が強調され、田瑞生自らカリスマであろうとして惑わした。一方、武漢では87年張志祥が元極功を公開する。これは道教気功で、口訣を用いた登仙の秘法をアレンジした功法は各地で張志祥の灌頂であらゆる病気が即座に治ると評判になり、蔓延流行した。

禪密功は関知しないが、これらの宗教気功は、当然公安当局から監視され、しばしば警告を受けた。これらの気功の下味は宗教であり、カリスマの演じる奇跡と説法に出会い、その信仰に酔う味を覚えた大衆は、より過激な味を求めている節がある。

そこに法輪功が言わば真打ちとして登場する。北京、91年のことである。

法輪功の特徴

法輪功(1)と、他のかつて流行った宗教気功(2)との決定的な違いは何だろうか。

それは、(2)はみなこの気功をして修行に励めば救われるぞ、ご利益があるぞ、だから一緒にやらんかね、とそういう小乗的スタンスであるのに対して、(1)は、この世は末世だ、とは直接言いはしないが、人心が乱れている様子を具体的に指摘し、修煉する者はこのように対処していると例を挙げて説く。社会批判をしている。もちろん婉曲に党の根本政策を批判していることになる。そして李洪志は『私の願望は、もっと多くの人々が受益できるように、真に修煉したい人が法に従って向上をめざして修煉できる

ように、大法を公にすることです』と言う。他の気功はもちろん、古典も軒並み否定してこの大法に従うことを強要しつつ、大乘的なのである。

もう一つ、(2)は健康になる、病気が治る、長生きする、と言う。つまり、命功を言う。(1)はやかましく性功を言う。煉功者は常人とは違う、真善忍で自らを修めよ、厳しく律せよ、と言うのである。最終目標のために、と。

だから、これは気功と一体の仏教系の宗教である、とみなして考えるのが妥当である。宗教は別に悪ではないが、この法輪功の説法集（『転法輪』=92-94の李教祖の説法録）を読んでいると気色は悪くなる。気功は具体的にどういうふうにするのか、一言も書いていない。そのかわり大法が真理であり教祖である自分の法力がいかに強いのか、そしてその大法を修め悟りを開いていくための心構えはうんざりするほど書いてある。

心構えは、練功の中で、自ら学んでいくことじゃないか。そこに価値があるのだ。その価値の代わりに説法が置き代わって、懇切丁寧に押しつけてくれている。だから、ごもっともでございます、私は御免被ります、と。しかしこれは練功家としての私の意見、感覚である。

宗教ならどうか。

たとえば臨済宗という仏教の教えがある。悟りを開くのを助けるのに坐禅という修行をする。

オウム真理教という仏教的な教えがある。悟りを開くのを助けるのに独特の瞑想修行をする。

「法輪大法」という仏教的な教えがある。悟りを開くのを助けるのに法輪功という気功をする。

一般大衆の理解を得るため、興味を引くため、少なくとも敵を作らぬため、修行の手段である坐禅や法輪功を体験してもらって、信心がなくても心や体の足しになることを実感してもらおう機会を提供するのは宗教としての本能である。手段として優れているものは、普遍的な内容と構造を持っていて、心身に及ぼす良い影響も確かであるものである。

問題は、手段としての坐禅や瞑想や気功にあるのではなくて、目的であるその教えの中身なのではあるまいか。

なぜ流行ってしまおうのか

今の中国で、しばしば新奇な気功が流行ってきたことに注意を払う必要がある。新奇な気功とは前述の香功、元極功、法輪功である。この実体が新興宗教であることは言うまでもない。功法がすばらしいから流行るのではなく、法力が強く説法が魅力的だから流行るのである。

その対極に、権力が強く思想が色褪せた政治があり、世知辛い世の中がある。今や気功を装った新興宗教だけがそういう世の中に対する不満のおおっぴらで健康的な捌け口なのだ。多少人数が多くなっても「この法門に入って修行すれば健康で長生きできます」という程度のことであれば跳ね上がらないように監視はするが咎めはない。しかし、人心を改める志向性、つまり人間関係を(修行を積んで)改めていくとなると、それは社会批判につながる。

はっきり言って、法輪大法には見るべきものはない。私たちはこのところ日常的に色々な考えや態度に始終晒され、心がよそよそしくなっているので世の中が染まるほど蔓延する経験を持たない。法輪大法ごときには魅力を感じない。逆に法力を誇示したり、他の気功や古典を排除否定する姿勢に如何わしさを感じるだけの感性がある。しかし、中国では、それが媚薬のように機能するのだ。

中国気功には《一専》とあって、一つの功法体系で学び続けることが有益であり効果的であり師に対する仁義であり当然である、とする伝統が根強く残っている。実際、一専方式には良い点もあるが、予め「この門が最高または唯一」とする主観的すぎる前提を受入れなければならない不自由が感じられる。日本でも、気功を学ぶのにこの一専方式を無批判に踏襲している団体がたくさんある。ときどき、そういう所で学んだ人が転勤などでこちらに来て、気功を続けようと私たちのところに尋ねてくる人がいる。どんな気功をしていたんですか？と尋ねると手印を結んでつつ立っているだけだったり、採気法だけを習ってきていたり、すごく閉鎖的、局所的であると感じたことが何度もある。

そういう意味で、法輪功事件は日本のオウムがサティアンで秘密裡に修行したのと対照的に、公園や道路でおおっぴらに(気功を借りて)修行した新興宗教に対する弾圧事件といえることができるのである。

中国の気功を締め付け

【北京1日(中村史郎)】中国政府は国内の気功団体に對して、小さなグループは解散させ、大きなものはいっせいに団体の再登録を求める方針を決めた。「邪教」として非合法化した「法輪功」の勢力がなほ根強い為、気功活動全体を対象に管理を強めるものだ。共産党や政府内では、法輪功の広がりを事前に十分つかめなかったことや、チベット仏教の活仏(生き仏)カルマパ十七世の出国騒動から、気功団体や宗教など精神的な活動への対策が不十分だったとの反省がある。

中国筋によると、政府は①省・自治区や直轄市の単位でつくる気功団体は各地方政府に団体として再登録させる②それ以下のレベルの団体はすべて解散させる③共産党員が三人以上参加する団体には党支部をつくる④党・政府関係者は団体の代表を務めない、この方針を決め、近く実施する。団体登録は今年中

法輪功・カルマパ出国で反省

小団体→解散 ■ 大団体→再登録

旬を期限とし、一昨年に改正された「社会团体登記管理条例」が適用されるとみられる。

昨年四月、法輪功メンバー一万人が党・政府の中枢である中南海を取り囲んだ事件に、指導部は大きなショックを受けた。政府は幹部らを摘発し、根絶やし作戦を展開してきた。しかし法輪功はいまも散発的な抗議活動を続け、類似の「邪教」集団も後を絶たない。気功活動の管理強化で摘発のしやすい環境をつくる狙いだ。

締め付けの一方で、党・政府は深刻な反省もしている。別の中国筋によると、政府の国家宗教事務局は一月、法輪功やカルマパ問題に関する意見書をまとめ、「これまでの(宗教界などの)統一戦線工作に失敗があった」と報告した。気功や宗教への理解が不足していたとし、カルマパ問題では、カルマパの教育にあたる僧の選任を監視したと指摘しているという。

◎ この記事が朝日新聞3月2日(朝刊)に載った。私の危惧は現実となったわけだ。私の論旨は、法輪功騒動は一時的局所的な特殊問題ではなく、1950年代以来の「気功というもの」の俗決算であって、いわばなるべくしてなった当然の帰結として理解しなければいけない。気功は、どのような体裁をとるにせよ、中国では冬の時代に入ったと見るべきである——という日中気功界の中で最もペンシステクな見解であった。

中国の気功は、特に大衆化その気功は、集団的・組織的に行なわれる可能性が今後うんと大きくなる。いわゆる「流行気功」は姿を

変え、病院などの医療気功、リハビリ気功、老人向けの保健気功へと収斂していくのだろう。

もし、日本から気功の新しい息吹きが寄せられなければ、気功そのものが、特殊な趣味へと後退してゆくことになる。しかし、こういう問題意識を持っている人は私以外ではないと言ってよく、見通しは暗い。

日本では締めつけられるわけではないのだから、たななて(一ターキな奴が指導している)うちは、日本の気功も、ギリ食ってことである。

法輪功その後

(や)

■前号で、中国政府が法輪功の完全制圧に失敗して、弾圧を強化したという新聞記事を紹介した。気功を指導しているくらいの人なら、法輪功が何をやらかし、この1年間、どうなったか知らないわけではない。しかしこの事態にコメントしたのは、法輪功の日本組織の人以外では、私の知る限り津村喬氏だけで（99年8月、脈脈）、法輪功を知っているだけでなく、指導したことがある人でさえ、揃って知らんぶりだ。中国政府はやりすぎだよ、とか、それは中国の国内問題じゃない？とか、結局、気功と法輪功の区別もよくわからない人だらけだ。いや、わからなくなつていいと言う人だらけだ。

別に、声をかかげて自分の意見を表明せよと言っているのではない。ただ、聞かれたら、きちんと自分の立場と意見を述べられる用意をしておきなさい、と私は気功指導者には言いたい。私はすでに自分の考えを書いた(ゆーき70 99/8.10)が、最近、新聞に法輪功に関する記事が載っていたので、ここに紹介してあらためて解説するので参考にしてほしい。

アメリカの国際宗教自由委員会が、法輪功のスポークスマンを呼んで公聴会を開き、こう聞いた。「法輪功は宗教か？」 答「法輪功は宗教だ。教会こそ持たないが、道教を基礎に精神を高めようとする活動だ」 委員会はこの報告書をアメリカ政府に提出し「中国政府が法輪功などに対する弾圧を改めないなら、中国に対する恒久的な最悪国待遇を付与せず、中国のオリンピック開催を阻止すべきだ」と勧告した。

(毎日新聞 00/5/27 「アメリカの新情報」10より)

■津村氏はその『法輪功はオウムか』と題する評論で、

- ①法輪功は香功や智能功と並ぶこの時代の典型的な気功だから弾圧に反対だ。
- ②中国政府は「法輪功はオウムのようなカルト教団＝邪教だ」としたが、共通することもあるが、サティアンも作っていないし、サリンを撒いてもないし……弾圧される理由はない。江沢民の歴史的誤謬だ。
- ③法輪功は、開放政策下の社会的不安や批判意識をつかんだ。逆にいうと、経済開放の病理である。
- ④人民の心をつかみはしたが、環境問題に言及できず、道徳問題を安っぽく説いただけで、開放経済の病をえぐりだせなかった(法輪功の歴史的限界だ)。
- ⑤中国気功は神秘主義、権威主義、商業主義の泥沼に低迷するのか、大気功の道を見いだして人類新文明の建設に寄与するのか、今、その別れ道にきている。

と書いた。典型的な浮ついた反対論の中、法輪功に対しては〈香功、智能功と同様のこの時代の典型的な気功である法輪功は自分のやりたい気功ではないが、弾圧には反対だ。〉と言っているにすぎない。

■私も同じ時期に法輪功について書いた。私の論旨は、①共産中国で、あんなことしたら弾圧されるに決まってるじゃないか、この政治音痴めが。②法輪功は、気功だけど、気功じゃない。新興宗教が修行と勧誘のために、気功を盗用しているだけだ。というものだ。私はいちいち弾圧に反対だなどと言うひまがあったら怒りと憎しみを抑えることに集中する。私は共産党主義が体質的に嫌いだから。それから、私は津村氏とは対照的に、法輪功はオウムと同じだと思っている。違いは要するにサティアンで修行するか、公園で気功するかだけだ。中身と親分は甲乙つけがたいほど愚劣だ、と。そういえば、私はオウムについても書いた。修行研鑽の中に、真実を見いだそうとする若者のところを擁護する、と書いた。法輪功についても、同様だ。ただ、連中の選択眼は悪すぎた。これでは救いようがない。

で、去年は「ただ健康のために気功しているだけの私たちがどうして弾圧されるのか」と言い募っていた当の法輪功が、1年たった今「教会は持たないが、宗教団体だ。その我々は弾圧されている」と訴えている。こういう奴らは、信用できないね。それに、弾圧を食らってるからと言って、ドラマと一緒にしてもらいたいかよ。食えないね。

■それはともかく、この法輪功事件は、中国共産党が新興宗教を認めないので気功集団という隠れ蓑をまとっていたのがばれて弾圧食らっただけのことで本質的に気功とは関係ないのだ。キリスト教も、2000年ほど前はエルサレムの新興宗教だったわけだから、法輪功を馬鹿にしているわけではないが、宗教にとって弾圧は勲章だから、宗教者だと言うのならもう少し、がんばってなさいと言うしかない。少し、冷たいけど。私は気功家として、この程度の新興宗教と連帯しようとは思わない、悪いけど。

しかし、法輪功弾圧のあおりを食らって、市井の気功団体の活動が締めつけられている現状は、残念である。今公園はひっそりしているけれども、中国の気功は、日本の気功と違って広範な市民に認知され、学術的にも医療の現場でもしっかり根づいていて、支える層も分厚い。その中国気功が、試練の時を迎えたのだ。中国の気功家に言いたい。宗教としてでも、宗教の代用品としてでも、また医療の補完物としてでもなく、また敢えて言えば環境運動の星としてでもなく、まず気功そのものとしてより完成度を高める努力をしてほしい、と。そういう仕事でなら、私は、これまで以上に連携したいと思う。

法輪功と中国気功の前途

山部嘉彦

中国当局は苦り切っているよ。たかが法輪功ごときにこんなに手を焼くとは思ってもよらなかったはずじゃん。新聞テレビで飽きるほどキャンペーン張ったのに連中ときたらちっとも堪えていない。それどころか、30年前のサイゴンの僧侶のように、町のど真ん中で焼身自殺までしちゃって…。これって、中国にとって大事件じゃないの？

○まったく、そのとおり。指導者の李洪志は数年前にアメリカに「亡命」していてインターネットで世界各地の拠点に指令を出している。アメリカは人権にうるさいと思われたがっている国だから、中国では宗教弾圧が行なわれているという訴えがあれば喜んで調査し、発表する。

○李洪志は中国大衆に対しては「健康のために気功をしているだけなのにどこがいけないのか」と声高に語りかけ、アメリカでは「法輪功は新興の宗教である。われわれの信者が弾圧され、人権が抑圧されている」とその筋に訴えている。李洪志は自分の信者がこれほど粘り強いとは思っていなかっただろうし、中国当局はもっと思っていなかっただろう。これまでもしっかり取り締まってきたのに、ちっとも収まらない。

○……法輪功さえやっつければいいと思っていたが、最近10年の気功はどれもこれもカリスマ迎合タイプで、トップの言うことなら何でも鵜呑みだから、法輪功と似たようなもんだ。同じくらい危険だ。それに、いつの間にか全国展開しちゃって、膨大な会員を擁しているではないか。これまで野放しにしてきた気功集団も、ここらで仕切りなおしたほうがいい。危険な芽は小さいうちに摘むべきだし、でかくなりすぎた集団はこの際、分割だな……。

○というわけで、この1年間余りにわたって検討してきた気功集団弾圧政策が昨秋、日の目を見て、全国にお触れが回った。要点はこうだ。

①現在の気功組織は、どれもこれも例外なく、皆一旦解散。

②その上で、もし今後も活動したいというのなら、条件付きで許可する。

(1)全国（統一）組織はとにかくダメ。これまであった全国組織の中枢機関は接收し、医療施設や一般の保養施設などに転用する。

(2)全ての気功組織は、中枢機関を省単位とし、複数の省に跨がる交流を禁止する。

(3)すべての気功組織は、登録されることになる。登録は許可制とし、必要条項を満たした者に対して当局が慎重に審査を行ない、許可、不許可を決定する。

(4)各組織は、省当局（衛生部）の支配を受けるだけでなく、共産党の支配を受けることになる。

③法輪功は、国家、党に敵対する反革命であるから、今後も思想闘争を維持し、徹底的に弾圧し、完膚なきまでに粉砕する。そのためのセンターをこの2月27日国務院に邪教問題防止処理弁公室として立ち上げた。やるぞォ！と。

○どうです、凄いでしょ。凄いですよ、共産主義っていうのも、中華帝国の支配の伝統っていうのも。西洋流の人権なんて、全然お呼びじゃない。我が国には我が国の事情と責任あるやり方がある、口出しせんどくれ。——というわけで、昨年10月大連で禅密功の研修合宿の参加者が（大阪の気功協会主催）、これまで20年にわたって全国各地で活動してきた親分の劉漢文老師が非常にナーバスだった、と語って聞かせてくれた。そう、禅密功だって例外じゃないのだ。

○一方、法輪功気功集団の方はどうか。李洪志も中枢も、ニューヨークの一流ホテルにあって、何重にも要塞のようにガードされながらもコンピュータで会員管理指令を出しているんだから、アメリカでも、また日本でも、派手に宣伝し、活動している。先だって、横浜の法輪功日本本部？から資料がどっと送られてきた。その文章を読むと、中国語を直訳したとおぼしきこなれていない日本語なので、日本本部と言ったって、その内実は中国人留学生のネットワークにすぎないと容易に想像できる。

○法輪功と李洪志のことは書いてあるが、気功のことは何も書いていないその資料は福岡気功の会にとってはゴミ同然であったので、気の毒だが、ごみ箱に直行。こんな内容では、日本の気功愛好家たちの同情も支援も受けられまい。せめて、法輪功が他の気功とどう違い、どう同じか、優れている点は何か、もう少し丁寧に語らなくてはいけないし、アメリカで自分たちは宗教集団だと言っているのだから、ここ日本でもその説明をしなくてははいけない。

でも、そんな力はないし、そういうポリティカルセンスもない。やっば、ダメだ。

○さて、今後、私たちと中国気功家たちとの交流はどうなっていくのだろうか。はっきりしていることは、学術研究であろうと培訓であろうとおおっぴらな気功交流は当局のケチがつき、手続き上ややこしくなって下火になるであろうということである。外国人に気功を教えるということ自体、外国を基地として共産党の天下を脅かす活動の温床になりかねないではないか…とまで考える奴が、当局にはいるにちがいないのである。

こんなご時世に、当の中国人は「気功は21世紀の世界に貢献する中国の伝統遺産であるッ」などとは考えないものである。大丈夫、私は考えますから（笑）。

中国気功に未来はあるか…観気旅行から帰ってきて、またちょっと考えてみたんだけど

気功は世界中に広まるか

山部嘉彦

3人の先生に会いに行く

この9月末、中国に行ってきました。中国観気旅行は今年で10回目。内外の会員17人で行って来ました。マンネリ化してきましたので、思い切って止めるか、形だけ継承してがらりとコンセプトを変えるか、そういう転換を念頭において、3人の先生方をお訪ねしました。

ひとりには張天戈(ちやてんか)先生。北戴河気功療養院の主任医師を勤めた方です。もうひとりには陳啓斌(ちんけいひん)先生。北京で20年にわたって霊元功を指導してこられた方です。最後のひとりには、この旅をコーディネートしてくださった王滬生(わうせい)先生。古仙人法を伝える一方、1983年から88年まで北京中医学院在職中に中華気功進修学院の教務長だった方です。この学校は、全国の気功師の知識技能水準を平準化するための再教育施設で、全国に散在する練功家が自分の狭い見地に気づかずに誤った指導をしないように、半強制的に受講させられましたが、そのカリキュラムと指導者の配置を仕切っていた方です。

法輪功で流れが変わった

ご承知のように、1998年に法輪功の「事件」が起こって以降、それまで公園で盛んに行なわれていた気功が影をひそめてしまいました。当局が、巷間の気功指導や集団練功を不穏なものとして弾圧の対象にしたためです。当局は、法輪功を簡単に始末できると考えていたらしいのですが、口は固いし、信念は曲げないし、折々に粘り強く抵抗をする。焼身自殺さえ敢行する。たかが気功と思ったら、宗教的な結束をもっていた。そこで、気功であれ何であれ、全国組織がカリスマ的指導者を擁して社会活動をすること自体、共産党を脅かすと思いついて、昨年夏、組織の解散と不動産の接収を断行しました。

いったい、中国気功はどうなっていくんだ？

気功は医療気功として誕生した

気功は、解放直後の1949年から「気功療法」として始まりました。医者も足りない、病院設備もない、薬もない、そういう疲弊した貧しい国情の中で、伝統を生かして人民に奉仕するために、研究が始まり、臨床実践が始まったのです。しかし、気功が直ちに市民権を得たわけではありません。盛んになったのは、1976年に文化大革命が終息してからのことです。特に1980年代になってからは、古典気功の復刻だけでなく、太極拳を素材とした気功をはじめさまざまなタイプの保健気功が次々と発表され、大いに流行しました。また特異効能を科学的に証明しようとして気功と結びつけ、混同して喧伝したので、気功の評価は高まりました。この様子を見て、宗教的色彩を帯びた気功も登場してきます。それらは、病気の快癒や健康増進の目的を謳いながら、その奥底に共産党が与えることができなかつた幸福感、やすらぎを求めていた人民の心に何か訴えるものを持っていましたので、爆発的に流行しました(と私は見えています)。その中の幾つかは、日本にも紹介されました。元極功、智能功、香功、法輪功などです。その裏側で、地味な、伝統気功の普及の活動がありました。つまり、一口に気功といってもいろいろな種類があって、1990年代は百家争鳴の状態でした。そこに、法輪功「事件」が起こったのです。

日本で気功はなかなか流行らない

幸いなことに、日本では1982年頃から、太極気功や、いわゆる地味な伝統気功が、支持され、愛好されるところからスタートしましたが、1990年前後から中国人気功師の相次ぐ来日とセットで洪水のように紹介された新興の気功は、大きく発展できませんでした。しかし、太極気功や地味な伝統気功も流行したわけではありません。大きく発展できなかったのは、先発の地味な気功も後発の派手な気功も同様でした。

一体、何故なのでしょう。いくつか理由が考えられます。

一つは、気功が所轄官庁(厚生省、文部省)はもちろん、医療の現場で受け入れられなかったことです。

一つは、社会的役割と直接リンクできずに、趣味のサークルと同様の扱いに甘んじてきたからです。

一つは、目的も指導法も曖昧なまま、「気分」で普及が続けられたからです。

一つは、指導者に目的意識が希薄で、学術的には中国のテキストに追随していたからです。指導法や組織運営まで中国人気功家に依存したり、やり方を踏襲してきた所も少なくありませんでした。

一つは、気功団体が他の気功団体に対して、敵愾心や警戒心が強く、交流しようという意欲に乏しく、実際、交流は低調で、業界として育っていないからです。

もう一つは、気功を紹介するメディアと社会現象の影響が考えられます。マスコミは、中国の「特異効能」を気功とみなす立場を流用して、さかんに超能力、超常現象をおもしろおかしく紹介した番組を作り、煽りました。95年にオウム事件が起きると今度は科学的に説明できない「気」などをテーマとした番組を一斉に自粛して、敵視しはじめました。気功に対する及び腰の姿勢をメディアは醸成したといえます。

気功自体に問題がある？

以上の理由は、それなりに妥当ですが、私は気功自体に根本的な問題があると睨んでいます。

中国では、中医学がしっかりと根を張り、国家によって支持された医療気功があり、一方流行気功は庶民にとって一種の娯楽の要素がありましたし、老人には、病気になって家人に経済的に迷惑をかけないためには自ら節制して病気を予防しなければならぬし、自分でこつこつやって治せるのなら、気功をすることは実利的な作業にほかなりませんでした。また、マクロ的に見ると、道教や仏教が携えてきた伝統的な修法には有力で確実な伝承者がおり、出版も盛んで、学術的にそれらをバックアップする機関が存在するのです。要するに裾野が広いのです。

日本では、鍼灸医学の評価は低く、医療気功の源泉となった道教や仏教が携えてきた伝統的な修法はなきに等しいのです。比較的普及しているものに、野口整体、橋本操体、指圧マッサージなどがありますが、基本は施術であり、自己鍛練ではありません。自己鍛練法としては肥田式強健術がありますが、気功との共通項は多くはありません。つまり、気功は実質的に、日本ではニューファッションなのでした。

日本で気功が普及しない気功自体の根本的な問題の一つは、自己鍛練であるということではないか。私にはそう思えるのです。庶民が自己鍛練をするという歴史を日本人は持っていない。修行するのは今も昔も、出家した人や武術家など、「世間離れ」した人なのです。

もう一つは、明治以来、百年以上にわたって、伝統的なものを破壊し尽くしてきた歴史があります。とくに、この戦後50年間の自国の歴史伝統文化に対する封印作業は徹底しています。気功の功理（バックボーン）には、経絡理論や陰陽五行説があります。気功を巷間で趣味でやる分には何ら支障はありませんが、教育機関や他の公共機関が採用するとなれば、それらを古すぎて怪しいという評価と闘う必要に迫られます。

特殊用語と概念を払拭できるか

健康であれ、精神状況であれ、切実感があれば、バックに陰陽五行説が控えていようが得体の知れない施術をしようが、人はそれを受け入れます。例えば治療法がなく、急速に体力が消耗していくエイズの患者にとってみれば、何もしないより、可能性にかけてみる気になるでしょう。

しかし、軽い興味、関心で覗いてみよう、味見をしてみようという態度では、気功は見た目にも地味で奇妙で即自的な魅力に欠けます。何せ、気功は地道に自分でしなければ威力を発揮せず、効果を受け取れないのですから。

さて、拙文のタイトルは『気功は世界中に広まるか』でした。この答えは簡単です。切実感があれば（出てくれば）、気功は広まり、成果を上げられます。だが、それは個別的な事情に依拠した議論で、本当のところは、気功を本質的に理解したら、その理解を古い概念と用語によらず、今日の世界の何処にでも通用する概念と用語によって説明できるかどうかにかかっています。

流行気功はもうダメ

張天戈先生にいただいた資料によると、北戴河の医療気功の実績が去年あたりになって「突然」認められ、気功師養成の体制を含め法令整備が軌道に乗りはじめ、国内的にはもちろん、国際的にも普及発展する可能性が出てきたことが伺えます。また、これまで衛生部の中医薬管理局の管轄下にあった気功が、医療気功と健身気功に分別され、前者は従前どおり中医薬管理局で、後者は体育局で管理されることになったということです。張天戈先生をはじめこれまで医療気功に従事してこられた人達にとってはこれは画期的なことで喜ばしいことなのです。

が、この政府の気功政策は、とりもなおさず、気功の医療保健効果は認めるが、気功の名を借りた思想も宗教も決して認めないということでしょう。

さらに言えば、経済の開放政策は推進するが、政治の自由は認めないとする国家戦略と軌を一にしているわけです。気功はそういう意味で、完全に中国共産党の政治思想に飲み込まれてしまいました。

政治のはざまの中国気功

さまざまな流行気功が巷間を席卷している最中、その当事者たちが自分たちの活動形態や組織が一個の社会勢力として機能することを自覚したフシはありません。目も当てられないほど恥ずかしい限りの政治音痴なのでした。智能功の明(ぼん)氏は今年6月になって自分の数十万人規模の巨大な組織を解散しました。幹部の暴走を止められないかも知れないと危惧してのことだと張天戈先生は説明しました。まさか。その筋から恫喝されて応じざるをえなかっただけでしょう。

総じて、流行気功には功理がない、それゆえ問題を起こすことになる——そう理解しているようでした。それは陳啓斌先生も王滙生先生も同様でした。

私の理解はそうではありません。中国では、実利的な気功以外は認められないということです。また、共産党以外の権威はそれが非政治的な集団であっても認められないということです。気功の質の問題は、その次のことではないでしょうか。先生方は、そんなことは百も承知で、敢えてそれを語らず、この10年間の気功界の乱れについてのみ語ろうとしたのかもしれませんが。

気功は、今後中国国内では、登録され管理された医療気功と健身気功以外は活動できなくなります。おとなしくさせられてしまうのは分かりきっていますが、実際どのようなようになるのか、多分紆余曲折が予想され、非常に不透明です。法輪功だって表看板は健康です。健身気功と宗教気功の区別はそう簡単ではありません。が、その可否を決めるのは、当局ですから、厳格+監視の体制のもとでの活動になることは避けられません。日中を初めとする国際交流も、多かれ少なかれ制限的になります。

気功が愛好される時は来るか

再び「気功は世界中に広まるか」と自問してみます。気功を《このような症状に対してこのように用いれば、このようになる》というようにマニュアル化すれば、今日の方の鍼灸治療の程度には広まることでしょう。気功師は、局所治療の鍼灸師と同様のスタンスで、治療業界に活躍の場を得ることになります。それは、医療気功が世界中に広まる一つの姿です。すでに、日本に定住した中国人氣功師は、気功治療の看板を掲げて実際に営業しています。あとは、資格を付与して、管理するだけです。

しかし、それには気功が世界中に広まるという感じが私にはありません。患者と新しいタイプの治療家が登場するだけです。それにもし、厚生省が気功を治療法として認可するのだったら、もう認可していたでしょう。厚生労働省になってから、認可しない体質が変わったという話は聞きませんし、日本に限らず主権国家が、中国国家が認定した国際気功師をそのままその国の気功師資格保有者と認定するなど考えられません。

私が、気功が世界中に広まるという感じは、どの国に行っても、少し広い公園に行けば一人ぐらいはさりげなく自然に站樁功をしている、そんなイメージです。その、練功している人が別に中国好きの人というわけではなく、経絡や陰陽五行も知らずに、ただその国の言葉による天人合一の境地でやっていれば、言うことはないのですが。

そういう広まり方は、気功という専門技術が受け入れられるというのとは違います。病気だからというのではなく、老人であるとなにかかわらず、自分で身につけた気功をたしなみとして練功する人がいる。日本でも早くそうなればいいのですが、十年たっても、まだ黎明期の感が強い。それに、伝統気功を実践している中国の先生方から学ぶことがまだまだたくさんあります。その先生方といえども古典を誤解していたり、指導法が稚拙だったり、いろいろ問題を抱えているのが現状です。

要するに、歩いてきて、景色は変わったけれど、道は遠いのです。

これまでひたすら習う一方だった中国の先生方との関係は、今回、私が自分の問題意識を直接ぶつけることで少し変わりました。伝統気功をそのまま使えないという認識は同じ。では、どこをどういじるか。いじったところをよくよく見ると、中国人のクセと限界が分かる。私がいじれば、自分では分からないクセと限界がやはりあるにちがいない。しかしこれからは、そういう交流が必要になってくると思います。大ごとですよ、これ。